ART KISS LETTER

vol.52

FREE

[アート・キッスレター]

FOR KUMAMOTO ART PEOPLE

Contemporary Art Museum,Kumamoto
熊本市現代美術館発行　http://www.camk.or.jp

EARLY SUMMER
[2011.初夏号]

水・火・大地展展示風景 撮影：宮井正樹

巻頭言　水・火・大地展ー耳を澄まし、目を凝らして見ること

熊本市現代美術館館長　桜井武

「水・火・大地」展では、瀧シリーズの鮮やかで密度の高い千住博の絵画の部屋に始まり、最後は遠藤利克の水音のする船の部屋で終える。出品作家は、杉本博司、淺井裕介と、一貫して自然を制作のテーマとしてきたR・ロング、D・ナッシュ、A・ゴールズワージー、それに火薬を使った造形作家蔡國強。彼らは地球を舞台として活躍するアーティストたちだ。彼らの国際的な評価は高く、その活動は常に注目されて来た。今回の展覧会の主題はもちろん大自然の水、火、大地であるが、もうひとつのテーマは「耳を澄まし、目を凝らして見ること」と言えよう。千住の部屋からナッシュ、杉本とギャラリーを進んでいくと、水の音が聞こえ始める。それは遠藤の部屋から響いてくるのであるが、出会った自然の素材を駆使するゴールズワージーの川辺の作品と、見事に共鳴している。杉本の部屋は照明を暗く落とし、抽象画のような海景の写真作品は、じっと見つめると、波がはっきりと際立ち、湧き立つ海が浮かび上がる。遠藤の部屋はほとんど暗闇で、よくよく目を凝らさないと黒焦げになった船の全容と激しく落ちる水は見えてこない。それが一旦見えると、この部屋が蔡國強の長大な屏風、ゴールズワージー、ナッシュの木彫とつながり、そして冒頭の千住作品に呼応していくのである。会場で巨大な壁画を制作した淺井は、同じギャラリーに並ぶロングの石のサークルと、とりわけ彼が敬愛するゴールズワージー作品の強烈な存在を意識していた。したがってこの大きな展示空間は、全体が希有とも言えるまとまりと不思議な調和を作り上げていた。今回の自然をテーマにした展覧会では、多くの方々が東日本大震災を連想し、自然のエネルギーや深い魅力と同時に、この展覧会から再生の力と深い癒しを感じ取っていただいたことが印象的であった。

熊本市現代美術館のさいきんの活動

MUSEUM INFOMATION

水・火・大地 創造の源を求めて展が始まりました

2011.4.9～6.12

現在、当館では、九州新幹線全線開業の記念事業として「水・火・大地 創造の源を求めて」展を開催しています。熊本には豊富な地下水、火の国の象徴「阿蘇」や「不知火海」の火、そして豊かな自然の恵みをもたらす大地があります。本展覧会は熊本のこれらの特徴につながる題材がテーマです。出品作家は、杉本博司、遠藤利克、千住博、蔡國強、リチャード・ロング、ディヴィッド・ナッシュ、アンディー・ゴールズワージー、淺井裕介の８名です。これらの作家たちによる、大自然の力に結びつき、尖鋭な現代性に基づいた表現をお楽しみ頂きたいと思います。(Y.H)

淺井裕介作品制作

2011.4.2～4.17

アーティストの淺井裕介さんが来熊し「水・火・大地」展出品作品を制作しました。展覧会開幕後の４月９日以降は、公開制作という形で展覧会来場者の方にも制作の現場を見て頂きました。

４月１日、淺井さんが来熊、天草に土を採集するため訪れ、制作の下準備をしました。1月19日、20日に採取した土も含めた14種の熊本の土に秋吉台の土を加えて15種類の土が並びました(その後、熊本の土は２種類増えて計17種に)。

４月２日、熊本市現代美術館ボランティアCAMKEESと一緒に制作開始。まず土を精製。手でゴミなどを取り除き、塊となっているものは砕き、ふるいにかけ、粒を揃えました。精製した土を水でねって絵具の完成。絵具は、本当に、水と土のみでできています。他に何も混ぜていません。ちなみに水は熊本市の湧水です。

絵具が完成したら、壁画に着手。今回は展覧会場内の巨大な壁と箱に絵を描きました。手を使ったり、刷毛で大きく線を引いたかと思うと細筆で細かく文様を描き込んでいったり、水を含ませたスポンジで土を消しつつ絵を浮かび上がらせたり、厚塗りした土を削ったり、と様々な方法で描かれていきました。ボランティアさんたちも、ときに筆をとり、制作に参加しました。先に明確な完成図を考えて描いていくわけではないと言う淺井さん。時々刻々と変わるイメージの、ある瞬間の姿も一つの作品として見て欲しいとのこと。その瞬間しか見ることのできない作品の姿を大切にして欲しい。だからこその公開制作なのだそうです。

４月17日、日々変化していった絵もその歩みをとめ、《泥絵・土のこだま　阿蘇 - 天草》と名付けられた壁画と５つの泥箱が出来上がり、会場の最後に展示されました。土に宿る歴史と力を感じるような、力強い空間となりました。(M.F)

千住博アーティスト・トーク

2011.4.9

千住博さんは、東日本大震災直後、多くの人は自分が何か役にたつことができるだろうかと自問している、このような時こそ藝術が求められており、人々を勇気づけ、互いを支えあう大きな力になるということを力強く語ってくださいました。さらに藝術にはさまざまな違いを認めて受け入れる心を築く礎となることについてもお話し頂きました。(Y.H)

【参加人数：90人】

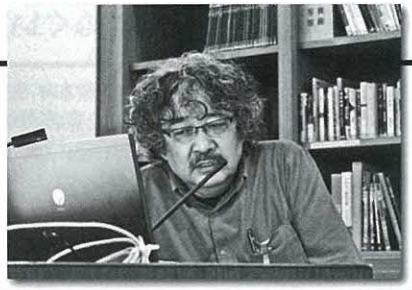
CAMKレクチャー・カレッジ「水・火・大地」桜井武館長

2011.4.24

「水・火・大地」展の企画者である当館の桜井武館長が、展覧会出品作家のなかから、イギリス自然派のリチャード・ロング、ディヴィド・ナッシュ、アンディー・ゴールズワージーが、どのように自然と向き合って制作を行ってきたのか、イギリスの彫刻の屋外の展示の様子を中心に紹介いたしました。(Y.H)

【参加人数：60人】

遠藤利克アーティスト・トーク　2011.5.1



水・火・大地」展の出品作家である遠藤利克さんにお話し頂きました。遠藤さんは水、火、土などを作品の構成要素として重要視してきました。ご自身の制作を通じて感じたことや、考古学的資料などから人類の歴史を読み解きながら発見したこと、それらの蓄積がそのような制作の在り方につながっていることをご紹介頂きました。(Y.H)

【参加人数：50 人】

熊本の華人展 vol.7　前期 2011.3.19～21 後期 3.25～27

当館の春の祭典、「熊本の華人展 vol.7」が開催されました。今年は 3 月 12 日の九州新幹線全線開業に合わせ、「熊本らしさ」をキーワードに構成しました。
まず、熊本で創設された流派である現代池坊、洗心雲林派、南草流、拈華流、肥後宏道流、藤久流、未生流、美水流、養真流をご紹介し、次に、華人にも熊本の魅力を再発見していただくために、「熊本の名所・史跡」「熊本の物産」「熊本の民俗・芸能」から喚起される物をイメージしたいけばなを生けていただきました。また、当館恒例のコラボレーションコーナーでは、昨年ご好評をいただいた、「マンガ」とのコラボレーションを今年も行い、熊本ゆかりの漫画家を取り上げました。熊本の華人の柔軟な想像力を心ゆくまで楽しんでいただけたようです。(E.Z)

WASSA MODA フォーラム　2011.3.26

熊本ファッションストーリー実行委員会との共催イベント「WASSA MODA フォーラム」がホームギャラリーで開催されました。第 1 部のファッション × カルチャートークでは熊本出身のスタイリストの坂崎タケシさんを、第 2 部のブランド × デザイントークでは、同じく熊本出身のファッションデザイナー田山淳朗さんをゲストに迎え、「ファッション」をテーマに、熊本の「これまで」と「これから」をお話しいただきました。また、2 月 12 日から 20 日まで開催された「ストリート写真展」の受賞者の表彰式も同時に開催されました。(EZ)

【参加人数：120 人】

STREET ART-PLEX KUMAMOTO 協働事業
ジョナサン・カッツ&アンディ・ウルフ　デュオ　2011.4.25

ストリート・アート・プレックスとの協働事業で、ニューヨーク出身でジャズ界を国際的に牽引するカッツ氏と、カナダ出身で日本に在住し、数々のミュージシャンと共演し活躍するウルフ氏によるピア & ックスジャズコンサートを開催しました。ジャズスタイルの「You Don' t Know What Love Is」や、スインギーな「It Could Happen To You」、「水・火・大地」展からインプレッションを受けた曲や、日本の尺八を意識した曲などが演奏され、ジャズの多彩な魅力にふれる素敵なコンサートとなりました。(M.O)

【参加人数：150 人】

第 11 回お話し玉手箱 LIVE 開催　2011.4.30

RKK アナウンサーの本田史郎さん、福島絵美さんによる文学作品の朗読イベント「お話し玉手箱 LIVE 」を開催しました。第 11 回目になる今回の演目は「字のないはがき」(向田邦子)、「鼻」(芥川龍之介)、「寄姫物語」(熊本の伝説から)でした。
「字のないはがき」では、ハガキを巡る家族の思い出の回想を、福島さんが柔らかな声で読み上げました。いくつもの思い出がつまった文章は、大仰な表現はありませんが、じわりと心に響くものがあります。福島さんの少し抑えた、しかし優しさをにじませた朗読が向田邦子さんの文章にぴったりでした。
芥川龍之介「鼻」は、古典を題にとって翻案した短編小説ですが、執筆された大正の当時にも、そして現代にも通じる人間心理が鋭利に描かれています。滑稽味と諧謔も併せもつ明晰な文章の魅力を、朗々とした、時に剽軽な本田さんの朗読が深めます。多くの人に読まれている名作ですが、朗読として聴くと、文書を読んだ時とはまた違う味わいを感じました。
最後は「寄姫物語」。開催中の「水・火・大地」展に合わせて、白糸の滝にまつわる昔話が朗読されました。語り手は本田さんと福島さん。背景には本田さんが撮影した映像を投影するなど演出も凝っています。兵部と寄姫の悲しい恋の物語に、会場の皆さんが聞き入っていました。(M.F)

【参加人数：80 人】

G3 vol.76「肥後★てぬぐい」展

2011.3.2〜4.3

熊本をアピールしたい！という熊本イラストレーターズの想いが形になった「肥後★てぬぐい展」が開催されました。九州新幹線全線開業に合わせ、熊本の数ある魅力を県内外のみなさんに知っていただこうと、熊本の歴史、名所、物産、伝統芸能などがてぬぐいにデザインされました。また、くまもと花絵巻実行委員会のご協力により、121 種類のデザインの中から 12 種類が商品化され、熊本の新しいお土産品としてお目見えしました。イラストレーターズのメンバー達にとっても、この展覧会は熊本再発見の機会となりました。(E.Z)

「オリジナルてぬぐい」をつくろう！ワークショップ

2011.3.6

「肥後★てぬぐい展」関連イベントとして、「オリジナルてぬぐい」をつくろう！ ワークショップが開催されました。参加者それぞれが持参した野菜やイラストレーターズクラブが用意した野菜でハンコを作って、自分だけのてぬぐいを作りました。レンコンや大根、オクラなど、時間を忘れてぺたぺたと真剣にハンコを押しているお父さんの姿がほほえましい ワークショップとなりました。(E.Z)

【参加人数：12 人】

G3 vol.77「稲原豊命　写真展　サイクル―環の江津湖」

2011.4.6〜5.8

九州の人気雑誌『NO!』代表であり、人気連載「九州美少女写真館」で知られる稲原豊命（いなはら・とよのり）が 1980 年代よりプライベートで撮りためてきた江津湖（えづこ）の写真作品を約 200 点展示しました。季節ごとに全く異なる表情をみせ、その変わり目には荒々しく粗野な印象さえ与えるありのままの江津湖が映し出されています。観客の方々のご感想には、「熊本の自然のすばらしさを再認識するきっかけになりました」などあり、熊本市内中心部にある江津湖再発見の場になったようです。(H.T)

アート・ツアー「わたしの江津湖をさがす」

2011.5.5

「稲原豊命　写真展　サイクル―環の江津湖」関連イベントとして開催されたこのアート・ツアーは、稲原さんとともに江津湖をめぐり、自分が見つけた江津湖の魅力を写真に撮影するというものでした（先着順での事前申し込み制）。
稲原さんと稲原さんのお気に入りスポットを巡りながら、「緑がきれいですね」「この花の名は？」「昔より水が少ないですね…」などと、なごやかに会話をしながらも、それぞれファインダーをのぞく目は真剣です。小学生から大人まで、それぞれの視点で、自由に江津湖を撮影しました。穏やかな晴天で、季節の小さな草花が咲き誇り、様々な鳥の声の満ちるなか和やかな時間を過ごしました。(H.T)

【参加人数：12 人】

収蔵品による特別展「キャラクターズ九州ゆかりの若手作家たち展」　2011.3.2〜4.11

井上雄彦《芍薬》2010年

3月12日(土)の九州新幹線の全線開業を記念して、収蔵作品より特別展示「キャラクターズ―九州ゆかりの若手作家たち」を行いました。目玉のひとつは、『バガボンド』で知られる井上雄彦の初公開となる《芍薬》。その他、熊本出身の注目の日本画家・山本太郎の《四季紅白幔幕図》　、いずれも2008年にびぷれす広場で公開制作された、瀧下和之《桃太郎図番外　鬼ヶ島で築城祭。》、ミヤザキケンスケ《熊本のカオ》を展示しました。(A.S)

詩の朗読会　2011.3.24&4.28

第88回　2011.3.24

今回のテーマは「かわいい」でした。12名の方と飛び入り参加1名の13名の詩の朗読・発表でした。「かわいい」のテーマにおいては、猫カフェや赤ちゃん、エリザベス・テーラーなどが主題となりました。また「かわいい」の番付について考えた詩作もありました。
3月11日に起きた東日本大震災をテーマに詩作を発表された方もいらっしゃいました。そのなかで、室犀星が書いた関東大震災の様子をつづったテキストをこの会で朗読されたのを聞き、詩人の伊藤比呂美さんが3月20日に急きょ熊本市内で開催した朗読会で、鴨長明「方丈記」にある震災・大風・津波の描写を朗読されていたのを思い出しました。(H.T)

第89回　2011.4.28

今回のテーマは「音楽(楽器)」。飛び入り1名を含めた13名の発表でした。ピアノやギター、トランペット、オルガンなどの楽器が詩に読み込まれました。行進曲、民族楽器のコンサート、波のリズム、風の音、また、「言葉という楽器」という表現で、音楽が主題にとりあげられました。発表に多くみられた傾向は、楽器の擬人化と、永い時間を生き続ける楽器や音楽という発想で、楽器や音楽が身近な存在であることとその永遠性への憧れを感じさせました。(H.T)

CAMK階段ギャラリー「熊本養護学校 階段ギャラリー展」　2011.3.2〜3.21

当館の階段ギャラリーで熊本養護学校の中学部、第Ⅰ学部(中)・第Ⅱ学部のみなさんの作品展が開催されました。紙粘土や綿を丸めて作られた立体や、色紙を細かく切って作られたユニークな色とりどりの動物たち、他にも染色や写真などさまざまなジャンルの作品が並び、華やかで楽しいギャラリースペースとなりました。お客さまからは「明るくていいわね〜」などの嬉しい感想も聞かれました。(C.T)

CAMK「読みがたり」　2011.2.12&3.12

第18回　2011.2.12

テーマは「冬のおはなし その2」。リスやゾウやツルまでもがみんなマスク姿で登場したパネルシアター『こんこん　くしゃん』や、「だーるまさん♪だーるまさん♪あっちにいってもこーろころ♪」の歌に合わせて、お父さんお母さんのお膝のうえでゆらゆらしてもらう親子遊びで盛り上がりました(C.T)

【参加人数：12人】

第19回　2011.3.12

テーマは「のりもの」。パネルシアター「トンネルをぬけると」では、チャリンチャリン♪と自転車が通りぬけるとバイクへ、バイクがブーンと通りぬけると自動車に変身！その後も電車や新幹線、飛行機へと早変わり。最後にはなんとロケットになって宇宙へと飛び立ちました。子どもたちは、トンネルの出口が気になってしょうがない様子。ロケットが飛び立つときには思わずおしりがあがるお友達もいました。(C.T)

【参加人数：7人】

ART de Gyan!

[アート・ド・ギャン]
熊本弁で「アート、どう？」の意です

[展評]

風の回廊　田尻幸子作品展

2011.3.9 ～ 3.27　Gallery 楓 Foo
熊本市神水 1-14-23　382-8320

当館の企画展「ピクニックあるいは回遊展」(2008 年)出品作家の田尻幸子さんの個展。繊細な繊維が会場入口から奥に向かって、ヴォールトつまりハーフドーム状に絶妙なリズムで繋ぎ合わされながら張りめぐらされている。一見クモの糸のようなはかなさばかりが目につくが、細い繊維での空間の多重的なフレーミングによって、その奥行きの前後関係は視覚を裏切りつつも、重さの全くない立体感が中空に生じている。もう 1 点のインスタレーションは、木枠のフレームを会場の見事な庭と、大きく窓が開くアットホームなカフェスペースに連携させていた。庭の木々にリズムよくフレームを配置し、窓辺にも配置。来館者は手持ちでフレームを持ち、自分好みのフレーミングを楽しませるというもの。作家が興味を持ち続ける「フレーミング」の奥深さを感じさせる作品だった。(H.T)

第 14 回　洛神書作展

2011.3.9 ～ 3.14 アートスペース大宝堂
熊本県熊本市上通町 5－6　096-354-2155

書家の森山淡草さんが主宰する洛神会の 36 人が各 1 点を展示した。森山さんは「養拙」を金文で大書し、そばに淡墨で「ことば」を添えてうまく調和させている。緒方龍生さんは蘇東坡詩等 3 首を 6 行の大作に、自由濶達な筆運びで見せていた。中川千穂実さんは「楽道而忘貧」(准南子)を古代文字の帛書で書いて新鮮さを感じさせる作となっていた。菊川華雪さんの「福聚海無量」。早崎和子さんの大作「李白詩 2 首」。川村芳恵さんの「鳴」。松田珠里さんの「対」。美並昭子さんの「抱甕」等が目にとまった。各自それぞれに自分の思いや好みで漢字、かな、大字書や調和大書を発表し多彩である。(S.K)

第 51 回 白鴎書道会展

2011.4.12 ～ 4.17　熊本県立美術館分館
熊本市桜町 3 番 22 号　096-322-1111

県下のかな書道界で最大の団体である白鴎書道会(中村天香会長)の作品展である。東京、福岡、宮崎、熊本等の会員約 170 人の「かな」や「調和体」の作品群は伝統書の流麗で華やかな美しさに満ちあふれていた。百人一首の和歌をカルタの実物大の料紙に書いた 35 名(日展入選者)の合作を約 10 メートルの大きなパネルに 150 点をあでやかに見せていた。今回も日展入選者 8 人による特別展もあり会場は見学者にあふれていた。
中村天香会長の軸は 4 点の小品だがさすがに渋味があり、上品に仕上げていた。(S.K)

Drawing 展

2011.4.26～5.8　崇城大学ギャラリー
熊本市花畑町 10 番 25 号　096-323-1158

崇城大学芸術学部美術学科の日本画・洋画・彫刻コースの学生・卒業生有志によるドローイング(線描・素描・デッサン)の展覧会。人物の木炭デッサンから水彩による風景スケッチ、日本画の大下絵、版画まで、多くの「ドローイング」が並んでいた。展示方法も工夫されており、端正でオーソドックスなデッサンなどが整然と展示される一方、ドローイングの特徴である未完成であることを許すおおらかさを十分にいかし、壁一面を使い不規則に描画された紙を張り付けていくなどの試みも行われていた。ドローイング(Drawing)は、「線をひく、描く(draw)」という動詞から派生していることからも分かるように、何らかの形を紙の上に表そうとするとき、最初の一歩となる行為である。造形の出発点でもあり何度も立ち戻る参照点でもある。日本画・洋画・彫刻と得意とする分野が異なる作家たちが、「ドローイング」を鍵として、描くこと、表現することの根元にある欲求や喜びに向き合っていた意欲的な展覧会だった。(M.F)

山鹿ガール vol.3 ～やさぐれ花魁 vs 新町斬ルガール～展

2011.4.3～4.30　新町三畳美術館
熊本市新町 1-10-28　080-4288-8882

山鹿ガールとは、文筆写真家、izu♡milk こと坂田いずみによる、スーパーローカルファッションフォトシリーズで、今回の企画はその第 3 弾である。これまでの山鹿市八千代座等での撮影を経て、今回は、熊本市街地からほど近い城下町、新町(古町)を舞台に撮影が行われた。展覧会場も町屋を改装した造りで趣のあるたたずまいである。写真には、新町と山鹿の江戸時代から伝わる古い建物や小物を背景に、あでやかな着物を現代の感覚で着こなす女性が役を持って映し出される。ポップで鮮烈な色彩と、写真の間に配されたモデルの心情を綴る言葉によって、色褪せた世界が鮮烈に甦るような感覚を持って物語の中にひきこまれていく。三畳のスペースで物語は完結するが、勢いと余韻を残す展示であり、町屋活用の可能性と、山鹿ガールの今後の展開が楽しみになる内容であった。(M.O)

2011年夏以降の展覧会のご案内

GUIDE OF EXHIBITION SINCE SUMMER 2011

2011年6月25日(土)—9月4日(日)

ファッション—時代を着る

A VISION OF FASHION,
from the early 20th century to the present day

ヨーロッパを代表するシャネルから、日本のコム・デ・ギャルソン、新世代のフセイン・チャラヤンまで、ドレスや靴、コルセットなどを通して華麗なるファッションの世界をお楽しみください。

パコ・ラバンヌ 1969年春夏
所蔵／京都服飾文化研究財団
撮影／広川泰士

2011年9月17日(土)—11月27日(日)

小谷元彦　幽体の知覚

Odani Motohiko Phantom Limb

国際的に活躍する小谷元彦(美術家・彫刻家)の初期の代表作から最新作までを一堂に集めた、九州では初めての展覧会です。「幽体」(ファントム)をキーワードに、木彫り、写真、映像、体感型インスタレーションなど、伝統的な手法から最新の技術までを用いた多様な作品によって展開される、その表現の本質に迫ります。

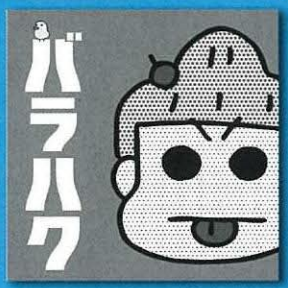
ファントム・リム(5点組)1997年
高橋コレクション
写真提供：山本現代　撮影：国守正和

2011年12月10日(土)—2012年2月12日(日)

バラハク 西原理恵子博覧会

BARAHAK Rieko Saibara
25th Anniversary of Manga Artist's Career

西原理恵子は漫画家生活25年を迎えました。作品の映画化、アニメ化、CM出演とまさに"サイバライヤー"が続きます。貴重な原画の紹介をはじめ、取材先での膨大な写真資料、元夫、鴨志田穣氏との思い出、作品の背景にあった出来事等々…、サイバラの仕事場に潜む資料の数々でその魅力を展示紹介します。25年間サイバラが過ごした「あの頃」、「この頃」が詰まった展覧会です。



© Rieko Saibara

2012年2月25日(土)—3月11日(日)

第23回熊本市民美術展　熊本アートパレード

Kumamoto Citizen Art Exhibition vol.23 KUMAMOTO ART PARADE

15歳以上の熊本市在住・在勤・在学者・熊本市出身者なら誰でも無審査で作品を出品することができる公募による展覧会です。

2012年3月16日(金)—3月25日(日)

熊本の華人展vol.8

Kumamoto Flower Arrangement Show vol.8

熊本のいけばなの祭典。熊本で活躍される流派の作品をお楽しみください。

マンガとのコラボレーションコーナーより
2010年

編集後記

新年度を迎えての52号の発刊です。震災直後から、様々なアーティストたちがそれぞれの立場と方法で支援活動を開始しはじめた姿に、アートとアーティストへの深い信頼を新たにする日々でした。震災でお亡くなりになられた方々へのご冥福を深く祈念するとともに、被災地の皆さまの安全と安心の回復への支援を当館スタッフとともに続けております。

編集長　冨澤治子

表紙写真に写る淺井裕介さんの壁画は、ボランティアの皆さんご協力のもと完成しました。壁画には、非常に細かい筆の集積によって、地中で次々と湧き出す命が描かれています。少しだけ筆を入れた私も、一筆一筆にさまざまな祈りを込めて描いたことを思い出します。この大きな絵が、多くの方に元気を与えるようお祈りしています。

担当　大岩みゆき

●発行元／ ART KISS LETTER アート・キッス・レター Vol.52　2011年5月発行(初夏号)　◎無料◎
●発行人／桜井　武　編集／冨澤治子、大岩みゆき
●デザイン／(有)松永　壮デザイン事務所　●印刷／シモダ印刷
●発行／熊本市現代美術館　〒860-0845 熊本市上通町2-3 TEL.096-278-7500 FAX.096-359-7892

●執筆者一覧
＊ギャラリー取材原稿の文末にイニシャルにて記載しております。

兼城昌山
Syozan Kaneshiro (書道家)

本田代志子
Yoshiko Honda(熊本市現代美術館主任学芸員)

藏座江美
Emi Zoza(熊本市現代美術館学芸員)

冨澤治子
Haruko Tomisawa(熊本市現代美術館学芸員)

坂本顕子
Akiko Sakamoto(熊本市現代美術館学芸員)

芦田彩葵
Aki Ashida(熊本市現代美術館学芸員)

大岩みゆき
Miyuki Oiwa(熊本市現代美術館学芸アシスタント)

藤本真帆
Maho Fujimoto(熊本市現代美術館学芸アシスタント)

高橋知江
Chie Takahashi(熊本市現代美術館学芸アシスタント)

SUITOTTO Kumamoto

CAMKフレンドインタビュー　＊今年度は熊本の次世代文化を支える人々をご紹介します。　［スイトット・クマモト］

加藤清正が築いた城下町であり、西南戦争の戦地だった「新町」。400年以上の歴史を持つ、情緒あふれる熊本のこの町で、まちづくりに取り組む宮本茂史さんにお話を伺いました。

新町・古町町屋研究会代表
宮本茂史さん

宮本さんがまちづくりに取り組み始めたきっかけはー

私はこの新町で生まれ育ったのですが、学生の頃に、お寺の過去帳で1750年頃から先祖がこの地に住んでいたことを知りました。後にまちづくりの会に誘われ、様々なこの町の歴史を聞く中で、自分達の身近な町が、大きな歴史の中にあることを改めて認識し、仕事だけではなく、まちづくりの活動を通して、新町の文化や歴史を後世に伝えていく責任を感じました。

まちづくりの取り組みについて教えてくださいー

新町には、さまざまな歴史と伝統文化があります。例えば、能楽の家元があったり、無形文化財である獅子の保存会があったり、マンガ「るろうに剣心」（和月伸宏著）の主人公のモデルとなった幕末四大人斬りの河上彦斎の出身地であったり、国指定文化財のオオクス群、藤崎宮跡、里程元標とキリがありません。熊本城の玄関口として様々な文化が息づく町です。
私が所属しているまちづくりの会、新町青年会「新風連」では、自分達がやりたい新町貢献をモットーに、町に親しみを持ってもらえるようなイベントを企画し、実行しています。例えば、伝統工芸である肥後コマ大会、料亭を会場としたマンガのコスプレイベント、季節のお祭りなど。それから、土日休みの商店も多いので、観光のために、シャッターにその場所の歴史にちなんだ絵を描く「シャッターアート」。年に4回行っている「城下町結婚式」。これは、熊本城内で式を挙げてから、人力車で町案内をして新町の料亭で披露宴を行います。引出物も、各商店のお醤油や辛子レンコンなどを集めたカタログから選べるようになっています。また、今年3月には、第1回「町屋が美術館、町屋アートホームin新町」というアートイベントも行いました。生活空間として使っている町屋11箇所に、地元アーティストの作品を展示して、多くの方にご来場いただきました。このイベントでは新たな目線で地元を見つめることができて新鮮でしたね。今後も続けて行く予定です。さらに輪を広げていきたいですね。

宮本さんの描く新町の未来予想図はどんなものでしょうかー

今年3月に熊本城下にオープンした「城彩苑」。古き良き街並みを再現していて素晴らしいなぁと思います。ですが新町、古町が目指すものとは少々異なると私は思います。200件近くある町屋の保存・活用を地域の皆さんに勧めながらも、過去の遺産に頼らず、昔とこれからを無理なく繋ぐ方法を考えています。新しい建物と昔の建物の色彩を調和させたり、歴史的にゆかりのある樹木を植えたり、交通の見直しを行ったり。住んでいる私達はもちろん、外から来られた方が歩いて見て回れる町、きれいに整備されていて良いイメージを持っていただけるようなまちづくりをしていきたいですね。
実際にこれまでも、駅都市間のまちづくり事業ということで、回遊性を高めるための城下町の再デザインを行政と一緒に行っており、新町と古町から24の事業を提案しました。今後さらに実績を積んで、多くの方に新町を訪れてもらえるように目指していきます。また、新町には伝統文化や町屋が多くありますので、自分達の身近な歴史を、イベント等を通して若い私達なりの新しい見方でみつめ直すことも大切です。「新町」の枠を超えて、熊本市現代美術館と熊本の町がもっと元気になるようにさらに歩み寄ってゆきたいと思います。（聞き手　大岩みゆき）

VISITOR'S LETTER

［来館者のみなさんからのメッセージ］

アンケートに寄せられた感想（抜粋）を紹介いたします。

水・火・大地 創造の源を求めて展

●公開制作中の浅井裕介さんにお話が聞くことができてよかったです。制作においてどんどん変化する作品とのことで何度も足を運ぶべき作品ですね。（熊本市内、女性）

稲原豊命写真展 サイクルー環の江津湖（展覧会アンケートより）

●江津湖は毎日歩いていますが、写真のような原始的な風景には驚きました。心を洗われる思いでした。

●江津湖は小さい頃、水の中を歩いたり、ビンで水をすくってその中に入った魚を見たり、とても親しみのある場所です。昔に比べたら水の量も減ったし緑も少なくなってしまったかもしれませんが、今でも水は湧いていてとても綺麗だし、枯れ落ちた葉が水面に浮いているのも本当に美しいと写真をみて感じることができました。

●不自由のない生活では、春夏秋冬の喜びを感じる事ができず、自分の生きる人間社会においても鈍感です。雨が降っても打たれっぱなし、雪が積もっても立ちつくし、いろんなものを払いのけて強くなっていきたいと思いました。

●果てた花や草たちを栄養として、そこから命がまた巡る様をまざまざと見せていただきました。水の流れが全ての命につながっているように見えました。

館内について

●書籍が充実して静かな環境で心が落ち着きます。

ホームギャラリーからのお便りvol.6

LETTER FROM HOMEGALLERY

**熊本市現代美術館のフリースペースにあるホームギャラリーとキッズサロンには、約8000冊の書籍が開架されています。
美術書はもとより、衣食住に関する書籍のほかにも、絵本やマンガなどジャンルは多岐に渡ります。そのなかからスタッフおすすめの1冊をご紹介します。**

「おしくら・まんじゅう」
かがくいひろし作　ブロンズ新社　2009年

誰でも一度はやったことがある「おしくらまんじゅう」をモチーフにした絵本。この絵本の中では紅白まんじゅうがおしくらまんじゅうをしています。おしくらまんじゅうの相手がこんにゃくだったり納豆！だったりするのですが、あたたかみを感じる絵柄とユニークな動きにまず目を引かれます。作者のかがくいひろしさんが絵本作家としてデビューしたのは50歳。28年間特別養護学校の先生として働いていました。豊富な擬態語やユーモラスな表情や動きは、特別養護学校の子供たちがどうしたら楽しんでくれるかを日々考えていたという経験が大きく影響しているものと思われます。54歳で急逝されたかがくいひろしさんが残された絵本は15冊。まずはこの「おしくら・まんじゅう」から、かがくいひろしワールドを堪能してみませんか。（E.Z）